



参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
ほっとひといき クロスワード	17
テーマ詠欄 「新」	18
一首評 「そらよみ」	22
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	24
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27

うたそら 第18号

発行：2024.01.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

Twitter
ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter で感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第19号

連作欄 8首の連作自由詠
テーマ詠欄 「3」＼＼3周年!!／／
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集中



第19号 メイカ 24 2/29(木) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「3」1首

第20号 メイカ 24 4/30(火) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「野」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

新しい年がやっとあらりました。本年も短歌誌「うたそら」をよろしくお願いいたしました。本年がすこしだな一年となりますように。元旦早々、北陸で大きな地震が起ひてしまいました。わたしめの作業をしつつ震度4の揺れを感じ、阪神淡路や東日本大震災を思い出しました。わたしめの生残らず無事で、一田も早く元の生活に戻れますもの。次号は3月発行の3周年号です。テーマ詠の主題は「3」です。たくさんの方の作品をお待ちしております。

編集鳥 千原いはる

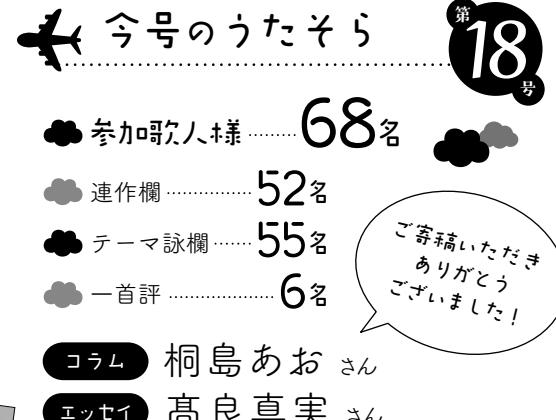
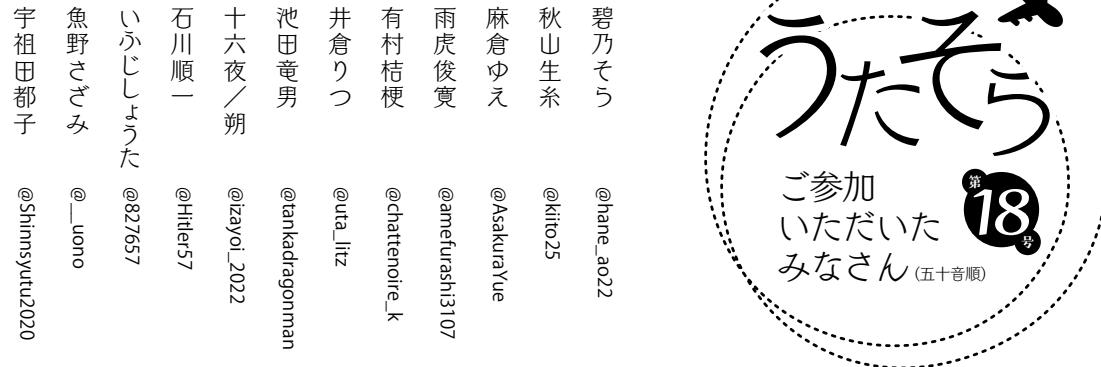


illustration: kohagi chihara



泳二	@Eishimada	白藤あめ	@ametext	御糸丸	@NEATzachi
hs	@hsweilt	寿同村マーベック	@xHksbNR4ww1wj8M	深影ムニク	@Cotoha_Mikage
大坪命樹	@Otsubomeiju	セニヤ	@pettichante	未知	@michi_31w
@Sinn1990		たえなかずや	@suzusuzu2009	水や	@m_iya_o
歌島孟	@amicus08	多香子		御園 ハル	@nyao_irr
河岸景都	@kareido1111	涸れ井戸		深山睦美	@57577_77575
鶴乃やい	@hane_ao22	千原いはる	@kokagi_tw	虫武一俊	@mushtake
秋山生糸	@kiito25	河岸景都	@kate_kawagishi	中村成志	@croissant_heyz
麻倉ゆえ	@AzakuraVue	かわはう	@sukamikan_kawa	北谷雪	村田一広
雨虎俊實	@amefurashi13107	水谷雪	@kityaya_misomiso	夏生 薫	@nakam8
有村桔梗	@chattenoire_k	れおぐれゆき	@Oyukimague	森内詩紋	@Njg4oEv5g5lcRpu
井倉りつ	@uta_litz	君村類	@kmrr_r09	なぐのひやー	@nabelab00
池田竜男	@tanakadragonman	雨城えつ	@Koharu_kura	奈瑠太	@nelda_aa
十六夜ノ朔	@izayoi_2022	くらだたけし	@tkuro2016	西淳子	@jacky244Ray
石川順一	@Hitter57	佐藤水魚	@kojo_ekekojo	薄荷。	@ale0himeco
こふじゅまへだ	@827657	汐射ハルカ	@shioiri_haruka	西淳子	@naldaa
魚野わんみ	@__uono	鹿ヶ谷街庵	@shikamabakuchi	廣珍堂	@4kitanka55
宇祖田都子	@Shinsyutu2020	西鎮	@xi_zhen_ivUT	疼木快維	@moriaki_aao
		雀來豆	@jacksbeans2	はやわ迷く八	@yoshino_tomoki
		白石夜花	@yohana_no_sekai	西淳子	@rou_tanka
		#おれた	@mskompompomfuwa23	杜崎アオ	

68名
計たへやくのじゆく
あらかじへんわごめやー。

8首の連作

色彩のうすい窓辺にみどり児の眠りのあつて雨あまく降る
本当は笛に生まれたかったんだ　ただひとときの風を導く
外宇宙の星もまばらな果てにある流れに浸していく耳ですね
いくつもの河を渡つてきた先の平野に架かる天使のはしご
充電中のスマホを抱いて眠るとき生まれるすべての子らに祈り
海沿いのとても小さな観覧車　どんな音色になつても好きだ
午後の陽のなかに落ち葉は渦まいて触れるのみな鍵盤になれ
昨日からほつれた糸が帆船を描く　始末の悪いことにさ

色彩秋山生系

秋山生系

師走ちかき街はせわしくりんりんりんのリズムで心を離す
淋しさが咲かせる花の色は知らずポインセチアの紅蓮は燃えて
街並みは冬枯れの色が滲んでかさかさと泣くわが恋心
誰が為に雪は降りつもる あなたへの贖罪をかき消す無垢の白
仄暮れの蝶の羽ばたきが湖うみを越え夜霧の街のかなしみを揺らす
薔薇の棘 しくしくと痛む瘡蓋かさぶたを剥がそうとしてしまうのはなぜ
テラリウムの小壇をふうとふくらませ春を待たずに花を咲かせる

Voice|less
碧乃そら

碧乃そう

大学一年生のとき、入門的なオムニバス講義があり、好きなものを百個書き出したノートを作るといいよ、と教わった。素直で律儀なタカラさんは好きな短歌を豆本ノートに書き付け始めた。

好きな短歌がずらりと並んでいるのは気持ちのいいものである。数年が経ち、今の私の短歌ノートはテキストデータで、歌集出版年順に整理している。評論を書く上ではこういうデータベースがあると便利だ。

この、いわば短歌の「列」から、「列」の短歌を探してみると、はじめに次の歌が目に止まった。

利だ。白秋の歌は牧歌的だけどすこしこわい。”たくさん”はこわい。茂吉のほうはもつとこわくて、キヤベツと豚を取り合わせたら野菜炒めになってしまふ。にんげんの手を逃れられず食べられる子豚の運命が暗示されているように思えてならない。

ああ大地はかくも音なく列をなす蟻を殺してゐる大西日　／渡辺松男『雨る』（一〇一六）

最近の短歌で「列」のこわさを活かしているのはこの歌だ。この歌で列をなしているのは「蟻」ではなくて「大地」ということになつてゐるけれど、思い描くのはむしろ巣穴に向かつて列を

煙に出て見ればキヤベツの玉の列白猫の^{ゆめ}ごと輝
きて居る／北原白秋『雲母集』（一九一五）
北原白秋の歌なのだが、キヤベツつながりで制
作時期の近い茂吉の歌がなんだか頭の中にちら
ついてしまう。

なす蟻で、かつ蟻たちが大西日を背景に死屍累々をなしている景だろう。死屍累々……。

ところで渡辺松男の代表歌には「夢にわれ妊娠をしてパンなればふつくらとしたパンの子を産む／『泡宇宙の蛙』（一九九八）」がある。今度

高良眞実



夏解けて 六甲ランドAOIAのスーパーF-パー最高だつた

世界初イルミネーション搭載の観覧車を背に「写ルンです」を

風見鶏がキヨロキヨロしつつ見おろしたふわりマフラー巻かれてる人

ぼくたちが赤や緑や金色に神戸の街を塗り変える夜

武庫川を越えてしばらく空仰ぐ 寝そべつている高速道路

今はもうあの観覧車は移設されハーバーランドの風車になつた

橙に滲むタワーを振り返ることができずにもう三ノ宮

あの世の門で待ち合わせ

井倉りつ

「田常詠」

石川順一

死にてえな、つてこぼすくちびる吸いとつてしゃほんだまにして飛ばしてあげる
ハイボールだつた液体に混じつて逆流している潰した心
悪心とはわるいこころだ 吐けばほら汚してしまうし壊してしまう
吐いたもの、そのまま置いてて。おやすみのあとにわたしが磨いとくから
天国に行けない君はきっとまた君に生まれてしまふんだろう
「新しい名前つけてよ はぐれても忘れてもまた好きになつてね」
そんな先の約束守れないよつていま笑いあうためのゆびきり
何度目のいといとしきみ、そうだつた、前世も恋で死んだんだつた

冬に咲く朝顔木の上占めて居る鉢の支柱を越えて居るから
冬に咲く向日葵畑の隅に有る木やプラスチックの支柱にロープ
神社には葉牡丹蝶梅竹飾り松飾り有り火が焚かれたり
年越しの蕎麦にはニシンとゆで卵カリフラワーが付属として有り
神社へは詩集を持って出掛けたり小雨を頬に時折感じ
神棚が掃除をされて大晦日母は風呂場へ私は神社へ
鍵掛けを忘れて家へ戻る時撮り鉄君はいまだに水辺
冬桜葉牡丹並ぶ畑見て枯芝踏めば穴は無かつた

起させる。また、鉄幹をめぐる恋のライバルだつた
与謝野晶子のことを見た。登美子は「姉のように」慕つ
ていたという。これらの情報をあわせると「いもう

と」は作者自身なのであると読み取ることができる
の。弱りゆく妹を見る姉のまなざしから一転し、
弱りゆく自身に目を向けてほしいと願ういじらしい
一人の女性が浮かび上がつてくる。

時代背景によつて異なるモチーフの解釈や、作者
の背景を知ることによつて見えてくるこうした歌の
広がりを、無視することは決してできない。その一
方で、たとえ「勘違い」だとしても、その歌から読
み取つた景が自分には特別な意味を持つということ
もあるだろう。そつした得難い体験にとつては、い
たずらに「正解」だけにこだわり、やみくもに背
景と結びつけて解釈しようとすることは、ある意味
で歌の世界を狭めることになりかねないようと思
う。

ところで、いざれは今も過去になつていくわけだ。

数百年先の未来に今の歌が伝わつたとして、果たし
てどんなふうに読まるのだろう。今は記録媒体が

発達しまくつてるので、背景情報が過剰に残りす
ぎてしまふ氣もする。「作者のこの日のポスト（旧
ツイート）から察するに」とか考査されたりして
……。むしろ情報が多すぎて、背景どころか歌その
ものが埋もれてしまうのかもしれない。

未来への妄想はともかく、今のところは自分の中
で「歌だけを愉しむ」「背景情報も込みで鑑賞する」
「自分に引き付けて妄想を広げる」みたいにさまざ
まな読みのチャンネルを持つていてもいいのかな
と考えている。大切なのは歌を好きでいることだと
思うから、読み方は絶対にこう！ と決めつけるこ

となく、多様な視点を学ぶことができたら嬉しい。

【今後の課題】

・女性の出家に関する「髪」の歌を見つけることが
できなかつたので、探す。

・現代の「髪」の歌について考査する余裕がなかつ
たので、長いスパンで鑑賞していく。

・近代以前の歌について考査する際に、「背景を知る
前の鑑賞」「背景を知つてからの鑑賞」のどちらも
なるべく記録する。

※今回は限られた字数の中でテーマを絞るために
「女性」という分け方をしましたが、生物学的な意
味での性別で区分けして論じることの乱暴さについ
ては、自分の中でもまだ整理がつかないままです。

【参考】
小高賢「近代短歌の鑑賞77」(新書館・一二〇〇一〔年〕)
山川登美子記念館(福井県小浜市)
<https://www1.city.yobama.fukui.jp/tomiko/index.html>

【髪に関する短歌 一部抜粋】
(「近代短歌の鑑賞77」より)

片山広子 3首
くしけづる此黒髪の一筋もわが身の物とあはれみ
にけり

若山喜志子、原阿佐緒、岡本かの子、金田千鶴
0首

今井邦子 2首
自らをあざけらむとて丸髷をにくにくしくも結ひ
にけるかも

柳原白蓮 3首
やはらかにわが黒髪も匂ふなりさくらさく夜の湯
帰りの道

茅野雅子 1首
髪ときて秋の清水にひたらまし燃ゆる思の身にし
るきかな

茅野雅子 1首
髪ときて秋の清水にひたらまし燃ゆる思の身にし
るきかな

四賀光子 1首
やはらかにわが黒髪も匂ふなりさくらさく夜の湯
暮らしけるかな

柳原白蓮 3首
今日はまた髪ととのへて紅つけてただおとなしう
暮らしけるかな

三ヶ島萬子 1首
洗ひ髪かわく心地に雨はれし麦のみどりをわたる
春風

九条武子 2首
もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが髪さへもそ
むくかと思ふ

九条武子 2首
もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが髪さへもそ
むくかと思ふ

※名前の後は、掲載歌のうち「髪」に関する歌の数。
スペースの都合上、ひとり一首の抜粋としました。
※「0首」について、あくまで「選者が代表歌とし
て採らなかつた」というだけで、髪に関する歌を作つ
ていないという意味ではありません。

狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき
せつなかる愛欲おぼゆ手に触れしおのれの髪のや
はらかさより

山川登美子 4首
狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき
風にむかはむ



短歌リレー コラム 七望遠鏡 18



短歌にまつわるあれこれについて
自由さままと書くページ
令号のテーマと書き手さんは…



女性の髪、それから 歌の背景について

テーマ

桐島あお

書き手

小高賢 編「近代短歌の鑑賞77」（新書館・二〇〇一年）で取り上げられている七七人の歌人のうち、十三人が女性である。彼女たちの代表歌として収録された作品を読んでいくと、「髪」というキーワードが頻出している印象を受けた。数えてみると、四八〇首収録されている女性歌人の歌のうち「髪・鬚」を含む歌は二六首。約五パー・セントとはいえ、十三名のうち九名の代表歌として「髪」の歌が含まれていることに、何か意味を探ることができた。

しかし、「髪」にまつわる歌が掲載されている九名のうち、五名の歌人については日高堯子氏が選歌しているということに気がついた。日高氏は著書に

まさにその代表例と言えるだろう。黒髪によつて彈むような若さをイメージさせたり、反対に髪質の変化から肉体の衰えを実感させたりする歌は、先に挙げた「近代短歌の鑑賞77」でも例を見ることができる。

待つといふ一つのことを教へられ髪しづき老／片山広子に入るなり

また、髪が乱れるさまから、恋の一場面であつたり、気持ちの乱れを想起せたりする歌も時代を問わず見つけられる。

黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人／ぞ恋しき／和泉式部・後拾遺和歌集卷三、七五五長い時を超えて、時代背景の異なる歌に共感できる喜びは、歌を読む楽しみのひとつだと思う。

一方、こうした普遍的イメージとはやや趣を異にする、その時代独自の「髪」の歌もある。

くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずしてた／くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずしてた／伊勢物語「筒井筒」より
謝野鉄幹から与えられた雅号である「白百合」を想

いもうとの憂髪かざる百合を見よ風にやつれし露にやつれし
／山川登美子を鑑賞するとしよう。初読では、作中主体が「いもうと」の髪（と髪飾りの百合）を詠んだ歌であるよう思える。だが、歌の背景にも目を向けることで、見えてくる光景は一変する。

「百合」というモチーフは、登美子が敬愛する与

平安時代に成立した伊勢物語のこの歌では、髪型の変化が女性のライフステージのちがいを象徴している。「髪を上げる」行為が結婚を想起させる点は、現代との大きな違いと言えるだろう。また、古文では「髪を切る」といえば「出家」を意味することがあるだろう。先に挙げた「近代短歌の鑑賞77」では、もちろんそうした歌は見られない。

こうした例をみていくうちに「歌を鑑賞する際に、どれほど歌の外側に目を向けるべきか」ということが強いように思う。さらに、現代であればカットにとどまらずヘアカラーやブリーチを題材とすることもあるだろう。歌を鑑賞する際には、必ず出家であることではなく、何らかの心境の変化を暗示する印象が強いように思う。

わたしは短歌を鑑賞し、感想を表に出す場合、なるべく歌そのものだけに着目して鑑賞したいと考えていた。歌は美景であるとは限らないのだし、作者の本心そのものであるとも考えていないので、作者自身のプロフィールやいま置かれている状況といった「背景」について必ずしも目を向ける必要はない、とも思っていた。

しかし、たとえば
いもうとの憂髪かざる百合を見よ風にやつれし露にやつれし
／山川登美子を鑑賞するとしよう。初読では、作中主体が「いもうと」の髪（と髪飾りの百合）を詠んだ歌であるよう思える。だが、歌の背景にも目を向けることで、見えてくる光景は一変する。

「百合」というモチーフは、登美子が敬愛する与

像のゆくえ

いふじしようた

わがまま

泳二

任せてよ未来のはなの花言葉わたしが全部「幸福」にする
お金への依存が病気ほどならばもつと楽して生きていけたな
はばたける羽を授かり自由得て飛ばないことで安心も得た
蚊取り線香の煙が揺らぐよう役にたちつつ消えていきたい
湖は静を操る 人の声は聞こえないただあなたをのぞき
お互いが自然と消えていった跡 とても綺麗な地層ができた
信じてる心のどこか片隅で花束をまだ握るくらいの
走り出すじぶんの残像を横目につららが落ちたその後のゆくえ

屋上摸部 18

宇祖田都子

不遇を託つ

大坪命樹

小春日を告げる氣象予報士の眼帯白し屋上は雪
先輩の指さす角に屋上の結界破る五線譜の呪詛
新任の国語教師が黒板の日影に記す悪夢の記憶
五年前屋上摸部存亡の危機に封印せし蛇遣ひ

背の低き古典教師は大雪の放課後をもち顧問を辞しぬ
存続のために除名を受け入れし後は悪夢の内に棲みにき
摸小屋に国語教師は横たはり無数の摸の群がるまだら
眼差しに摸を捕らえしことあらば涙は全て有毒ならむ

文学に己がまことを込めぬるに拙著のみ売れず 正しさ何ぞ
拙著のみ一冊だにも売れざるは不才がゆゑか 差別ぞ痛き
正しきのとほるべからざる世情見てわが不遇をば重ねみるなり
いにしへの不遇を託ちし先人ぞ思ほゆるかな なほ筆執らん
不遇なるあまたが先人めづらしき作を残せり われも倣はん
文学賞得るも得ざるもどんぐりが背くらべのごと 大きなる世よ
作品の成るもとたるぞ創作が神なる 何ぞ作者か誇る
芸術の神性が証 差別せずわれをも優しく癒すべきこと

大拙館にいたワタシ

歌島孟

大阪旅行

涸れ井戸

閉館の間際に着けば、騒きたつ心は雨に揺れる水面だ
大雨を気にせず飛んでゆく鳥よ。雨に急いだ肩が冷たい

湧きあがる詩情は軒端から落ちる雨粒みたく、ふいに突然
慈雨なるや、この雨。木々があまねいて諸手を捧ぐようにさざめく

池の隅おどむ落葉の醜さに目がいく、僕は死がまだ怖い
Nothing is beautiful. 禅を説くふりして僕は何も知らない
露堂々、雨に打たれるひとつやは中にたたずむ者を庇える

鎖樋伝わる水は連錠と強くて、そこに遺偈は要らない

π を計算する

がね

自分で置いていかれるなんて嘘ぬるま湯だからこわい世の中
洗濯機を回す、生活を回す π を計算するスーパーコンピュータ
ぼくだけが独占してるシュレッダーされた紙たちやわらかいこと
ポケットを叩けば増えるビスケット二つじゃなくてこなごなになる
瑞々しい林檎と言われて脳内に浮かぶ瑞々しくない林檎
寄り添う、を考えながら延々と並ぶ街路樹走り抜けてく
姿まれて悲しい物がない部屋に住めばひとりは軽いたましい
真っ直ぐに飛ぶ白鳥を追いかける数秒だけは走る動物

テーマソング

河岸景都

もう少し練習時間が欲しかった、ひとの仕組みを学びたかった
何一つ正しいことは分からぬ、分からぬまま朱色の名前
額縁の模様をそつとぞりだす綺麗なだけでいいこともある
自分だけテーマソングを失つて大人になつた子供を撫でて
走り出す私をセーブするように同じ日付を丸で囲つた
正解が正義でないと知つて右往左往を愛して
いたい
葬列のようなパーティーはまぼろし、主人公しか旅は出来ない
まだ行けるまだ行けるつて足搔いてるエンドロールを終わらせないで

一首評 「そらよみ」

一首評 西淳子

略称の「アプリ」じゃなくて「アプリケーション」
なのが笑っちゃいました。上の句のがマッチングア
プリで、下の句のが飲食店を探すアプリとかでしょ
うか。「アプリケーション」だけで十四音も使つちゃ
うのはすごいですね。このカッブルにとつて「ア
プリケーション」は恋のキューピッドなのかもしれま
せんね（あるいはディストピアみたいな恐ろしいも
の？）。もしかしてだけど、感謝とか畏怖の念がある
から略称で呼んでないのかも？

ア プ リ ケ – シ ョ ン で 出 会 つ た カ ッ プ ル が
ア プ リ ケ – シ ョ ン で ゆ く 喫 茶 店

渢 韶

前々号のまちがいさがし 答えあわせ

ほっこりといき 短歌で

10個のまちがいは
見つけられましたか？

16号のまちがいさがしの答えはこれら！

まちがいさがし 答えあわせ

Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

一首評「そらよみ」



前号の「うたそら」から

気になった一首をとりあげて

200文字くらいで語る

一首評のコーナーです

アレクサ忘れてしまってごめんなさい桃の風味ののこるお酒を

小泉夜雨

まぶしさに呼ばれたような、文庫本閉じれば川を横切るところ

早月くら

八首連作のタイトルは「ベース」、歌人にとってこれは「ひとり笑いする自撮りのボーズ」と思つて間違いない。読者に共感や承認を求めるサインだなんて考えないことだ。引用歌は連作の七首目、そろそろ締めるべき頃合いなのに、まだあなたもきみも家族も友人も出てきやしない。ほらそうでしょ言つたでしょだからと一緒にピースサインを掲げているわけじゃないんだ。わたしたちの傍にはせいぜいアレクサくらいしかいないんだつて。

一首評

雀來豆

(海しかない町だと聞いた) 月面に降り立つ真白な素足の写真

北谷雪

静の海、晴の海、嵐の大洋……そういうえば月にはいろんな〈海〉があつたな。そう思わせる一首。「素足」とあるが、アポロ16号の映像等から、宇宙服の無機質な「真白」を想起させる。

何度も読むと、この歌の語り手は徹頭徹尾第三者なのだな、と分かる(聞いた)「写真」等)。上句のパーレンによつて、微妙に宇宙空間の不安定さが増している。

土曜日の夜をふたりは持て余し、ライブカメラで、ジンベイザメを

早月くら

読点の産むリズムや言いさしによって、夜を「持て余し」でいる感が助長されている。この歌で重要なのは、ジンベイザメを直接見ているのではなく、ライブカメラで、そして恐らく家で見ている点だ。実際に水族館へ行つたり、映画を観たりしないふたりは、余日ある週末の浮遊感をそのまま楽しんでいる。巨きな水槽を雄大に泳ぐジンベイザメを、ふたりで部屋で見る週末は、夜の空気を拡張し、弛緩して、共有不可能な夜を構築してゆく。

一首評

疼木快維

ナミとみたあの日の夕焼け紅茶色サバランサバラン呪文のようね

十六夜／朔

ティーパックをくるくると回し紅茶が溶けだすまでは、時にすれば数分ですが、その数分に、キミとみたあの日の夕焼けと、紅茶と、サバランの、この3つを用いることで、茶の美しさを連想させる素敵なお歌だと思います。サバランは洋酒がしみこんだ大人向けの洋菓子。サバランサバランの呪文を扱えられるのも大人限定となりそうですね。呪文の効果で、キミとみるまたの日も起こりますように。

一首評

はゆき咲くら

生ハムの原本家にあつたなう

かわはう

ひつとまん

きまぐれおゆき

生ハムの原本家にあつたなら口説き文句としても使える

生ハムの原本家にあつたなら怖い上司にも強気でいける

生ハムの原本家にあつたならクラッカーの消費量が増える

生ハムの原本家にあつたなら鞄を一旦カートに入れる

生ハムの原本家にあつたならカットメロンについて手が伸びる

生ハムの原本家にあつたなら共同作業の練習になる

生ハムの原本家にあつたなら薄さの限界に挑戦する

生ハムの原本家にあつたなら世界が少し華やかになる

gift for

北谷雪

花束

君村類

お揃いの日めくりを買う待ち合わせできない早さで生きてゆくから

良い女になつたねあおちゃん喪中だと知るや静かな花ギフト券

時々はひとりにおなりたつぶりのジャムを口の端に溢して

パドルのようなブラシで梳かす漕ぐことを止めれば失いそうな性別

四つ目の箸置き眠るキツチンで乳飲み子と待つほのかな夜明け

新しい息継ぎとして一片の鱗のようなピアスに触れる

なんでもない風に話そうわたしたち丼とレンゲのように出会つた

ライオンのフォトグラフィは(もうちょっと右かな)ふたりの神さまだ(よし)

触れている鏡の中のわたくしがほほえむようにやつてくる冬

Universe 見上げた空は町じゅうの照明よりも星があること

誰も彼も冬の装いの人混みはふつくらとして生きるのはこわい

本当はかかるほどどの花束として生きられるはずのわたしたち

落ちていく眠りの前の瞬間に見つけた星をもう叫ばない

なんでもない朝の日差しを受け入れる部屋の素直さだけほしかつた

死んだとは聞かないせいでふたりでいた事実としての氷塊が途切れないと

花束の大きな花から枯れていくあなたを声から忘れるのだろう

庭の木を倒す重機は限られた動きでちゃんと仕事をこなす
人は木になりたがるけど木は人になりたがらない、これも自虐か

視線だと思って待つてみたけれど穴じゃないかと思つてもいた
置き去りにされてしまつたぬいぐるみを目を合わせずにゴミ置き場へと
(あなたから普通に見えたならば前ペちゃんこならばそれは横です)

見つけたと誰かが言えばそこにいて森が燃えても雨は降らない
行つたぶん戻らなくっちゃいけないし床にはこりはたまつていくし
やりかけのことがなかなか終わらない取つたメガネを置く場所がない

あかぎれにニベアの青缶ぬりながらあるべき世界の夢をみていた

練乳をチユーブから吸い怒つてゐるわけを言わぬ君のくちびる
もうきみが残していつたセーターの柄のトナカイみな死にました

家庭科で習つたカレーをつくつてた 母の帰りが早まる気がして
見る前に跳べ、と留学したけれど今は家から一步もでない

雪の日にお湯に浸かつたカピバラも日本情緒のひとつと思う
泣きながら蟹とたわむれ啄木はそのあと蟹を食べただろうか

あみ棚におにぎりひとつ置いてあり爆弾を見るように見ていた

自由

汐射ハルカ

ライカ

西鎮

黒板を叩く白墨青色は藍よりいでし愛よりいでし

青いものばかり集めたこの部屋はどこかの国のはい鳥の巣
数学をかなぐり捨てて飛び出してぼくの右側仮想のあのこ

過不足のない文章が送られて未読のままで朝が来たのか

シトラスではじまりムスクで終わる水そうちだわたしは柑橘で眩惑う
あいを知り自由が散つたこれ以上紡ぎゆくこと出来ないさとり

落ちている櫛を拾つちゃいけないと教わるわたし七つの頃に
放課後のふたり街々燐めいて吹雪を走り肉まん買いに

また十二月のあなたを思い出す雨がゆっくり雪になる日は

ふたりならよかつたイルミネーションの真下を風を連れて歩いた
似たような遺伝子たちのすれちがうイオンモールは入江のゆらぎ
たぶん上機嫌な母が煎れたからくるくる踊る茶葉をみていた

遡ることのできない年の瀬へ誰かの鱗のように初雪

なにもかも上手くいかない日の終わりさんまの背骨をきれいに剥がす
漆黒の河へつぎつぎ消えてゆく雪、さよならの融点がある

ライカ、つてもう戻らない犬の名を遠くの雪原みたいに呼んだ

昨年にお湯を注いだごん兵衛に今年最初のくちづけをする

◆ まさに

スマホを落とした足にはアザが出来ていてすごいなあ最新のスマホは

◆ 御糸さち

新雪のように磨けよ厨房に青い眼をした見習いがくる

◆ 深影コトハ

新雪にまみれてみれば冷たさは淡さと同義なのだと思ふ

◆ 未知

新しい靴を履いたのすこしだけ痛かったけど笑つてゐるよ

◆ 水也

新しい国を作つた15人すら集まらず少子化を知る

◆ 宮岡りょう

大量のトランプを口から出してそのまま逃げていつた新兵

◆ 深山睦美

新顔です感じいいコンビニだけどもう来られないかな旅先に

◆ 村田一広

新しき顔我も欲し今少し世に立ち向かう力つけたし

◆ 森内詩紋

あたらしいかなしみのこと 白樺のようにはがれるあなたの日記

◆ 杜崎アオ

新人の気持ちで生きる父母^{おや}という盾を失くした最初の季節

◆ 杜野詩季

来世では博士になつて新しい花にあなたの名前をつける

ピン札がATMから出るやうな奇跡できみと会つたのだらう

◆ 亂

◆ 好乃智紀



「新」

東海道新幹線から海が見える たぶん死ぬ日も見る同じ海

◆ 秋山生糸

最新のアニメを追える日常は豊かで四季をにぎやかにする

◆ 麻倉ゆえ

見つめあうことはなくとも僕たちは新快速でもたれて眠る

◆ 雨虎俊寛

振り向けばおろしたばかりのペン先の描く螺旋のやうなさみしさ

◆ 有村桔梗

見たことないふたりになりたいならやつたことないことをやつて見せてよ

◆ 井倉りつ

鳴き交わすだけでいいのに声は荷を新しさの贋の荷を運ぶ

◆ 池田竜男

あらたま年の初めにかかる月 満ちては欠ける久遠の流転

◆ 十六夜／朔

新鮮な朝顔見ればパレードが思い出されて体格差知る

◆ 石川順一

とりあえず「新」つてつけられば千年も前のものでも若者が継ぐ

◆ いふじしょうた

白色の筆が墨色さらわれて新しくなるなんてばかだよ

◆ 魚野さざみ

この嘘を新しい約束として未来のために指切りしよう

◆ 宇祖田都子

見たことのないものであふれ世界 怪物たちの新居のように

◆ 泳二

新しい願いを日差しにさらしたらあの日の毛並みの匂いの夢を

◆ hs

新月に何も見えない夜を越えて、いつかは終わる旅をしている

◆ 歌島孟

暖冬に花

中村成志

彗星

奈瑠太

トーストを囁けば月の沈む朝 穴を空けないピアスもあつて
浅すぎる水の流れを手のひらに掬おうとする藻掻きのごとく
後れ毛を挟めば耳は髪型の一部であると知らしめてゆけ
きつちりと締めて二秒の蛇口より咳喘ぎつつ水の一塊
大谷石の垣の削れに刻をおもう幾々千の雨の流れを見
見るならば手の甲だろうひと筋の傷のみ皺を寄せ付けない甲
躰の無い男なるもの肉求め湖へと浸るこの真冬の日
質問を幾度も変えてあぶり出す性格のよう、暖冬に花

セーフティゾーン

なべとびすこ

Once upon a time

西淳子

火をつけてない爆弾と寝るときにマッチは極力遠ざけて置く
グラノーラ 朝に追われているような気がする朝に声援をくれ
紫陽花の種の形を知らないし精子の頃の思い出もない
バラサウロロフスのリュック背負ってる子どもはずつと二コ二コしてる
傘に鍵、靴に鍵、ロックカーに鍵 はだかの僕を誰も殺さない
消火器は役に立たないまま寿命 きれいなままで終わつたバンド
ガスタンクは京セラドームを道連れにするだろうその火を見送るよ
法律のレールのうえを歩いてるTAB譜見ながら弾くギターソロ

明るくはじまる今日で良かった

薄荷。

コール・アンド・レスポンス

疼木快維

寒い日はミルク多めのコーヒーと一緒に劣等感も飲みこむ
ストーブが微かにじいいと鳴つていてシユールはきつとこういう音だ
お高めのバニラアイスを分けあつて夜の長さをきみと味わう

ソファーから投げ落とされたクッションのハートはハートのまま落ちてる
冷蔵庫じいいと喰つて真夜中に働いている人もいるのだ

早朝にブランケットは優しくてわたしの肌を温めている
カフェオレの湯気は白くてこれからのことあなたと話したくなる
朝方の雨に街路は輝いて明るくはじまる今日で良かった

朝方の雨に街路は輝いて明るくはじまる今日で良かった
カフェオレの湯気は白くてこれからのことあなたと話したくなる
朝方の雨に街路は輝いて明るくはじまる今日で良かった

トロトロな週末

はゆき咲くう

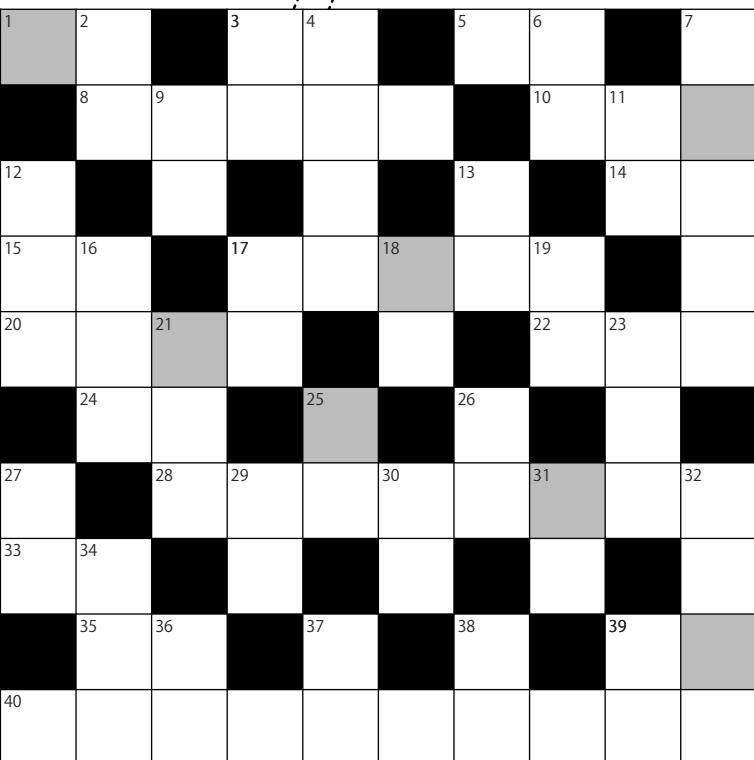
京都・バス・電車

廣珍堂

「君も飲むかい？」ドリップ泡がはじけて いつものカップ並べておくよ
ブランチは雑穀米の粥仕立てデルフィニウムをちゃんと揺らして
特売のチラシ見つけた「今日だつて！」走れメロスよピー・カンナツツ
深夜ドラマのつまみにしよう 戰利品 腕に食いこむ重みうれしく
頭痛・肩こり・オレガノ混せてオープンヘ グツグツしだすカラダ溶けだす
好きすぎてラップに残るクリームを味わい尽くす お行儀？ へいき
ユーカリのエプソムソルトかき混ぜてお風呂に浸かる ゆでだこになる
週末はニマニマしてて顔の色バナナまるごと焼けばトロトロ

外国人観光客の背中へとくつつきて待つ駅のバス停
少年は受験票だけを頼りとし駅から9番バスに乗りたり
終バスが九時前といふ街ならば灯火のごとおりますボタン
難読の駅名を呼ぶ嵐電の車掌の声は土地のひとらし
狭すぐる安全地帯に立つひとと減速し行く準急電車
微笑みとサムズアップで会話する外国人と都のひとは
地下鉄の赤字路線の駅に立つ観光客と中学英語
琵琶湖まで十五分なる地に住みて大津の宮の古き声知る

クロスワード



ヨコのかぎ

- の輪、○○袋、○○比べ
- 歩いたり走るときに使う
- 魚を取る道具
- 東海道新幹線の起点駅
- 月が明るく照る夜
- 傍、忘、忙、共通の読みは？
- 2番目の干支
- これから先。未来。
- ～は三文の徳
- 原稿を寄せること
- 笑いの○○が合う
- 有名タレントやインフルエンサーは持っています
- 首・手足・しっぽ以外の体の部分。
- 父や母の女性のきょうだい
- 魚○○、ヨーヨー○○
- 即席めん

タテのかぎ

- 今年は辰
- の雲「ふわ」と数えることに対する 一ふわ二ふわ
三ふわの雲／吉川宏志
- ボーナスの別名
- 植物が出す甘い汁
- 火事を消し延焼を防ぐ。○○○○○車。
- 鬼はそと、福は○○
- 物事がもつしきみの大きさ。「地球○○の環境汚染」
- 脳の活動によって発生する弱い電流の変化
- 田舎で人家が集まる場所。「第一○○人発見」
- わが○○○を干さん高さの向日葵は明日ひらくべし明日を信せん／寺山修司
- 春夏秋冬
- 黒くてとげのある海の生き物。中身はオレンジ。
- 手をのべてあなたとあなたに触れたときに○○が足りないこの世の○○が／河野裕子
- 記憶。「身に○○○がない」
- いま生きている現実。現世。
- これが出るときはマスクをしてください
- 印、○○鎖、○○書。
- 旅先で泊まる所
- 相手の言うことを打ち消すときに使う言葉
- 女子だけが集められた日パラシュート部隊の○○に膝を抱えて／飯田有子
- 地球の表面で、水におおわれていない部分。
- 君主として国を治めること
- 韓国の貨幣単位
- 終○○にふたりは眠る紫の〈降りますランプ〉に取り囲まれて／穂村弘
- めぐり合わせ。ラッキー。
- 魚などが水中生活するための呼吸器
- 指の先端にあるかたい部分



僕ときみのどちらかがここで死んだとて出回り続ける一千円札
アナウンサーは臨時ニュースをあらかじめ知っていたかのように読み上げた
無数の蜂の 僕は猫背で早口で目を合わす 声 ことができない
『僕の絶唱』『残響』みんなイヤフォンを髪で隠して俯いている
中学で飼ってる兎を見るときのひどくあかるい優生思想

僕が絶滅してからじゃ遅すぎる 灯台に三人の人影
血塗れの電話ボックスでは僕が夢占いをしているだろう
応答しろ俺の叫びが聞こえてるはずだ応答しろ応答しろ
応答しろ俺の叫びが聞こえてるはずだ応答しろ応答しろ

藍色のさみしいとりが渡るのをあおぎみている冬の角度で

疲れたらやすめる本がほしいです その綴じかたになまえをつけて
いなくなつた仔猫のことをかんがえる胸にしらない木がまた増える
あらかたをさがし終えても出てこない冬のリボンは冬の国へと

ぜつめつをまぬがれた鳥それからをゆつくりのぼる螺旋はみたか
みずうみは絵のように死に 絵はうたいつづけるパイプオルガンのようになにもかもうしなうまえにこの森へきなさい きみのすべてが蔵書
リマインドしました ここを旅立つ日そつとあづけたいものがあるから

みずうみは絵のように死に 絵はうたいつづけるパイプオルガンのようになにもかもうしなうまえにこの森へきなさい きみのすべてが蔵書
リマインドしました ここを旅立つ日そつとあづけたいものがあるから

「一つ」は空へお引越し

杜野詩季

真夜中のコーンスープに熱い風呂失くしたことへの冷えは止まらず
後悔の質とか量とか違うけど似ている顔で泣く私たち

不条理の渦を見せつけテレビには母が案じた中東情勢
溜められたチラシのゴミ箱広げれば炊事の度に母を想い泣く

入院を繰り返すたび増えたいたプラのコップの底には「コウコ」

伯父さんの手紙が眠る饅頭の小箱を誰が繼ぐか案件

朝顔は庭で小さくまだ生きる駅前広場は葉牡丹なのに

納骨で香る線香気がつけば気持ち良い空晴れ女の母

定食屋から洋食屋へと

笛地静恵

そつとおやすみ

まさけ

きさらぎの駅へ降り立ち駅前の霧にかすめる定食屋へと
たわむれに母を背負いてそのあまり重さに負けて二歩を歩めず
お母さんその喜びの日よたまきはる分裂はじめわれ受精卵
ほほえみに似てはるかな霜月の家の中鳴るピアノ一台
いまだけの気配を示す北風の雲を友とし尾根わたりゆく
寒風にゆられようやく居酒屋の四角四面の湯どうふの白
ほてりたるてのひら握り地下鉄の駅へ下りゆくひとりにかかる
小さな画廊をめぐりいきつけの洋食屋にはいつものワイン

同位体

福山桃歌

P、はじめました

御糸さち

薄氷は割れてばらばら本能に従えぬまま咲いてしまつて
キャンディがゆるくほどけていくように愛されていた記憶があつた

無自覚に傷つけて傷つけ合つて今さら嘘と言われましても

拘束の痕は赤くて剥がされた鱗が部屋に散らばっている

殺されるんだろうな 恋に 絶望に 眩しい朝に この感情を

投げ出した腕で確かに触れたんだきみの同位体やわらかかつた
まだ狂氣ほどではなくて微熱 目の奥を焼かれるような鈍痛

抱きしめてほしかった 愛させてほしかった なんにも残らなかつた



アラームは00:泣き声は2:50自然に目覚めてしまう 2:30

まだ慣れぬ乳房の痛み 宙吊りのパーさんと目が合う真夜中に

仮免の母と子なれば吸う方も吸わせる方も首を傾げて

もう二度とせぬ恋のこと歌にしつつ歯のない口に乳を噛まれる

永遠と思えるような瞬間の繰り返しなのだらう生とは

吐き出すのが下手なのは父譲りだね母はゲットを根気よく待つ

雨粒の滴る如きか細さで寝息を立てる 吾は眠れず

生理的減少終えてここからは昨日を超えてゆくばかりの朝

もう一度とせぬ恋のこと歌にしつつ歯のない口に乳を噛まれる

永遠と思えるような瞬間の繰り返しなのだらう生とは

吐き出すのが下手なのは父譲りだね母はゲットを根気よく待つ

雨粒の滴る如きか細さで寝息を立てる 吾は眠れず

生理的減少終えてここからは昨日を超えてゆくばかりの朝

想像の途中

未知

もはやそれ魔法でしようと言ふ時のきみの瞳に乾杯したい
そんなんでいいの後ろの後れ毛が少し無防備すぎやしないか
あざといと思うよきみが笑うたびあちこち光つて濡れているから
捕まえてじらんと急に走り出すピアスとともに跳ねる心臓

「黄色って嫌い。なんだか無理にでも元気出せて言われるみたい」
震えることは秘密に歌い出すときどき声が飛んでかされる
傷痕はまだ見せないで想像の想像のまた想像の途中
ほつとけば生える雑草なんだけどほつとけなくて陽射しと撫でる

太陽と星

宮岡りょう

太陽を掴んでしまったあんたとは月まで行つても会えないだろう
聞いてない ロックスターが本当に 小さな星になるなんてこと
薄闇の多摩川沿いで立ち尽くす 世界の終わりを Instagram で知る
新しい弦を手繕つて張り替える 今は悲しい音しか出ない
あの歌詞に意味を求めてしまうならロックはやめて学者を目指せ
紫の太陽のもと踊つた路地を過ぎ去る満員電車
もうとも盗んだバイクじや走れない歳の僕らは駅のホームで
葬式は「空洞です」をかけてくれ フェスタイルは「So Alive」で

開戦の報

深山睦美

あ、分からんんだ先生。そうなんです。こういう一揆はない。これまで
本当に悲しがってる人だけが、かなびよ丸と言うんじゃない
吊り革に首まで入れてみないかと微笑んでいる小顔の広告
怪物にも被選挙権があるんだねもうパフェじゃない液を掬つて
心臓をラジコンにして走らせてないの日本で君だけラジよ
宝塚歌劇団の団の字が團になつたら帰ります 母
徵兵を拒否した殺戮ロボットの家に卵を投げる人々
君のその病気、俺が見つけたから、俺の名前がついてるんだぜ

桜が香るクリスマス

村田一広

レモンアップルミントシナモン見逃して桜の紅茶見つけて買つた
ふはふはふは湿り気（雪）がほしかつた今年のクリスマス乾いてた
季節が終はる頃にリバーシブルだと気づく早速裏返す
芯出ないシャーペン書けないボールペンかすれたサインペンまとめ売り
うどんなら許される気が。真夜中に立つたまま啜つてる台所
重さの好きな缶ビール飲み干した軽さ怖くて飲めないでゐる
手に執つた蜜柑ふはふは軽くつて果肉がはりの日の光満つ
カステラと厚焼き卵似てるよね両方ならべ紅茶がすすむ

幸福論

虫武一俊

古楽の夕べ

森内詩紋

確実に老いに向かっていることを思う秋空に足止まるたび
手放した幸福論が大空に大きな弧を描く十一月
慣れはただ見て見ないふり へし折つてしまいたくなる一日はある
アキレス腱付着部炎の長引きよ一度に冬も老いも来るのか
歌集評 行つたり来たりするたびにドアの細部が気になつて
ctrl+v もできない ctrl+s もできないうつよあわれ
酒も飲まないので脂肪肝人生は反動と衝動でできている
もうジャンプしなくてもいい校庭のジャンプタッチの全てに届く

もうもろと灰色の雲は風にとけフィドルのごとく木立を鳴らす
チエンバロは誰か呼ぶ声 誰を、かは未だわからず されど待たるる
木管のフルート奏者半眼で消えゆく音を宥めるように
ヒュンメルヒエン倫しき音色この曲に合わせて踊る乙女在りしか
合いの手はハーディガーディたちまちに祭りの気分あたりにあふれ
明々と燃ゆる暖炉の前できくラウシユプファイへ腹まで響く
語りべはリュート爪弾き遠国の物語せり むくわれぬ恋